

# 渾身のアスリートを率いてロンドン パラリンピック選手団団長・中森邦男



1953年、大阪府出身。58歳。大学卒業後、大阪市長居障害者スポーツセンターに入職し、障害者スポーツ指導員として水泳を教えた。日本障害者水泳連盟の設立に尽力するなど、障害者スポーツの発展に奔走してきた。

現在は日本障害者スポーツ協会の指導部・企画情報部部長および日本パラリンピック委員会事務局長を兼任。2010年のバンクーバーパラリンピックでは日本選手団団長を務めた。2012年ロンドンパラリンピックもひきつづき日本選手団団長。

イギリスで障害者スポーツ(車いす)が生まれた当時、戦争で傷害(障害)を負ったあと自宅に戻り、社会復帰できない障害者に明日への希望を与えたのはスポーツでした。身体を動かすことで元気になり、運動中はその障害をれ、気持ちがあっさり晴れ、障害という壁を乗り越える前向きな精神力が、明日への希望が、現在のパラリンピックへと発展させてきました。2012年ロンドンパラリンピックはその原点に帰ることになります。

日本では、大震災により将来への希望が真っ暗な中、女子サッカーワールドカップで見た、日本女性が強豪国に対する「あきらめないひたむきさ」と、試合後の「さわやかさ」は、多くの人を明るく元気にさせ、大きな壁を乗り越え前向きに生きるように感じさせたことも、スポーツの持つ大きな役割と感じました。

また、本年6月にスポーツ基本法が制定され、50年を経てスポーツ振興法が全文改正されました。新たな法律の元で、「元気に」、「前向きに」、「あきらめない」、「ひたむきに」と「笑顔で」をキーワードに新しい障害者スポーツの世界を創造していきたいと思います。

ロンドンパラリンピックでは、選手、コーチ及び役員が、その持てる力を最大限に発揮することが好成績の必須条件です。選手には、これからロンドンに向けて万全の準備を期待します。

2012年8月30日にロンドンパラリンピックが始まった。164カ国、4260人の選手が参加する。日本選手団は135名。見所は選手の頑張り具合。車イステニスの国枝しんごさん、車イスマラソンの土田わかさんの活躍は楽しみ。

1960年に行われた第一回目のパラリンピックは障害者の機能回復程度の競技だった。2008年からはパラリンピックもオリンピックと同じ競技場で実施されるようになった。オリンピックの決まりがパラリンピックに適用されることになった。パラリンピックは「リハビリのスポーツ」から「本格的な競技スポーツ」に変わった。開催国イギリスは国を挙げてパラリンピックを強化している。

現在のパラリンピックへと発展した原点は、第二次世界大戦(1939~1945年)後のことである。1944年、イギリスのチャーチル首相らは、ドイツとの戦争激化により負傷し脊髄損傷になる兵士が急増することを見越して、兵士の治療と社会復帰を目的に、ロンドン郊外にあったストーク・マンデビル病院内に脊髄損傷科(Spinal Unit)を開設した(1953年に国立脊髄損傷センターと改名)。

その初代科長に、1939年にナチスによるユダヤ人排斥運動によりイギリスに亡命した医師、ルードウィッヒ・グットマン卿(Sir Ludwig Guttmann)が任命された。グットマン卿は、スポーツを治療に取り入れる方法を用いた(1944年にパンチボール訓練を導入、その翌年からは車いすによるポロやバスケットボール、卓球などを導入)。1948年7月28日(文献によってはロンドンオリンピックの開会式の日とあるため29日の開催だった可能性もある)、

グットマン卿はロンドンオリンピックにあわせてストーク・マンデビル病院内で16名(男子14名・女子2名)の車いす患者(英国退役軍人)によるアーチェリー大会を開催。これがパラリンピックの原点である。リハビリの中にスポーツを取り入れた。

1989年に国際パラリンピック協会が出来、最初は車イス。次に切断選手、視覚障害者、知的障害者が次々と加わって現在に至る。

自分は始めは大坂の長居障害者スポーツセンターに10年勤務後、東京に移動。始めは水泳のコーチをしていた。米国で手も足もない選手が泳いでいるのを見て感動した。

昭和51年ごろは障害者のスポーツ環境は大坂だけだったが現在は全国に23箇所もある。中国では障害者専用のナショナルスポーツセンターがある。1960年東京パラリンピックの時代、車イスでスポーツするのは良くないとされていた……。

現在、オリンピックは文部省、パラリンピックは厚生労働省の管轄になっている。2012年には5億円の助成金をもらっている。テニスの国枝君、さいだ君。主将のつちださん(マラソン)鈴木君(水泳)等は注目の選手。イギリスは国を挙げてパラリンピックをサポートし、重点競技には専用コーチをつけ、選手には手当てを支給している。

今後の理想は、住んでいる身近な処にスポーツに馴染める環境(ランニングコース、体操の出来る広場…)が整備されれば、日本はもっと元気になれる。人間の活動は 食べる、動く、寝る…に尽きる。オリンピック強化の手法をパラリンピックにも適用できたらありがたい。